

成功者の法則

2021.6.8

幸田露伴という小説家がいる。代表作は「五重塔」だろうか。露伴は人生における運を大切に考えていた。そして、人生における成功者と失敗者を観察し、一つの法則を発見する。

大きな成功を遂げた人は、失敗を人のせいにするのではなく自分のせいにするという傾向が強い

物事がうまくいかなかったり失敗したりしてしまったとき、人のせいにすれば自分は楽であろう。あの人がこうしなかったからうまくいかなかった。あれがこうなっていなかったから失敗した。物事をこのように捉えていれば、自分が傷つくことはないであろう。悪いのは他であって自分ではないのだから気楽なものである。

だが、こういう態度では、物事はそこで終わってしまって、そこから得たり学んだりするものは何もない。失敗の原因を自分に引き寄せて捉える人は辛い思いをする。苦しい思いをする。だが、「あれはああではなく、こうすればよかった」という反省の思慮を持つことにもなる。それが進歩であり前進であり向上というものである。

露伴は、失敗や不運を自分に引き寄せて考えることを続けた人間と、他のせいにして済ますことを繰り返してきた人間とでは、かなりの確率で運のよさが違ってくると言う。幸運不運は気まぐれや偶然のものではない。自分のあり方で引き寄せるものなのである。

では、学校の教員はというと、どうであろう。授業がうまくいかないことを生徒のせいにしていたらどうなるか。反省も進歩もなく、停滞した授業が続くだろう。その一方で、授業の度に、自分の指導を振り返り、次の授業のことを考えるような先生であればどうだろうか。少しずつ授業が改善し、生徒も変わってくるだろう。

授業の責任は教員にある。「ああ、今日もうまくいかなかった」と思い悩む先生の方が、生徒からすれば魅力的なのではなからうか。「ああ、授業が下手でごめんなさい」と心の中で生徒に謝るような先生はいるだろうか。

私の教員1年目が思い出される。毎日、心の中で子どもたちに謝っていた。謝りながらも本を読んだり、先輩の先生方がやっていることを観察したりと、「もう少し待って」「もう少し待って」と心の中で子どもたちに言っていた。1年間ずっと、そんな感じであった。苦しかった。自分の授業の拙さから、子どもたちが力をつけることができない。それでも、瞳を輝かせながらがんばろうとする。余計に辛かった。指導力がない分、子どもたちと遊ぶしかなかった。くたくたになりながら遊んだ。

露伴は、シンプルなひと言を残している。「失敗したら必ず自分のせいにせよ」どんな職業でも同じかもしれないが、教員はとりわけこの言葉を肝に銘じなければならない。